

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520313

研究課題名(和文) 諸学の相関から見た啓蒙主義詩学史 - 「模倣の詩学」の情動面を中心に -

研究課題名(英文) History of poetics based on relations among sciences in the age of enlightenment : Affective sphere of >poetics of imitation<

研究代表者

福田 覚 (FUKUTA, Satoshi)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・准教授

研究者番号：40252407

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：研究は詩学に「転換を生み出しうる機制」の考察となり、潜在的な理論的振れ幅を記述することとなった。情動や想像力の扱いや、それらの対象や構築物の複雑性は学問によって想定が異なることで、詩学の記述装置側の想定に連動して、詩学に親和的な学問が変わることが分かった。また、物語と物語のせめぎ合いから情動が発生する場合、どのような種類の物語がそれに関わっているか、真理の一義性と表現の多様性のどちらをより志向しているかによって、諸学の相関という観点と詩学との関係が見て取れるとの見解に達した。

研究成果の概要(英文)：This study developed to an inquiry about the mechanisms that is able to bring changes for poetics and described potential amplitudes of many poetic theories. Among sciences there are various ways how to deal with affect and imagination, and also various assumptions how complicated their objects and products are, therefore our subject, which science has affinity with poetics, depends on assumptions of devices of each poetics. If affects are created by the opposition of stories to each other, sorts of stories or tolerance levels of diversity of expression show states of relationship between poetics and other sciences.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：詩学 情動論 ドイツ 模倣

## 1. 研究開始当初の背景

(1)本研究を開始するまでは、啓蒙主義詩学とそのさらなる背景構造としての人文主義諸学との関係について、後者の提供する理論範型によって前者の学問的基盤が創発されてきたという観点から、とりわけ初期啓蒙主義に焦点を当てて研究を進めてきた。初めは、後期啓蒙主義における隠れた模倣説の存在、18世紀固有の記号論と詩学との関わり、詩学において情念の作用や知識の拡大という契機がもっている体系的な位置などの問題から、18世紀ドイツ詩学の研究を開始した。その後、研究の主たる対象を初期啓蒙主義に移し、当初の成果をより歴史的な考察の場に投入した。

(2)さらに「諸学の相関」という分析の視点を加えることで、詩学の体系の解明と統合された形で、詩学と他の諸学との連関を解き明かそうとしてきた。移りゆく模倣説の基本構造として、構想・判断・作用といった詩作法上の主要契機から成る枠組みを提示すること、詩学書の構成から詩学、修辞学、哲学の関係を把握することについてはある程度規定的に記述できるようになり、さらに、並行して進めてきた資料収集において、医学の分野で心身の継ぎ目の問題として想像力について論じられていたことや、自然学や神学にも詩学と通底する存在論が広がっていることが窺えるようになってきていた。

## 2. 研究の目的

(1)「模倣の詩学」にどのような転回が起こったかを記述するため、転換の機制について情念論に光を当てた部分から探る。修辞学の伝統は、啓蒙主義時代の詩学において支配的な思考規則や先導的な観念の作用域であるが、情念を巧みに利用するという形の情念論が、その時代の情念論のすべてではない。情念を浄化する、情念を排除するといった姿勢の情動論も学問の枠組みを越えて影響を与えている。そうした思考の相関から模倣思想の構造がどのように変化したかを説明できないか、学問史的な視点から転換の過程や機制に近づくことを試みる。

(2)諸学の相関を見通しながら「模倣の詩学」の移り変わりの姿を見ることで、「模倣説の終焉による近代美学の誕生」「他律的な模倣原理から自律的な想像原理への移行」といった従来の定式化に疑問を投げかけたい。そうした大きな枠組みのなかで、情念論と想像力論の接点に焦点を当てる。悟性の能力論、情念論、医学的な想像力概念、心身平行説などが虚構の物語に関わる地点に「模倣の詩学」が成立している姿を捉えていく。

## 3. 研究の方法

(1)研究の基盤となる文献収集に力を入れる。外国図書館での集中的な収集を軸にして進

め、国内所蔵資料の利用、入手可能な新しい文献の購入によって補完する。

(2)「模倣の詩学」の情動論的な面を記述するための論点整理を行う。悟性の能力論に拠って立つ詩学の立論、現実と物語の対比する立論(自然模倣説と可能世界論の親和性)、暗示や催眠にも似た、情動を伴った同化という観念の射程に注目しながら、情動と連想や物語の接合を意識させることになるこうした主題の延長上に来る論点、それに付け加わる論点、それらのバランスを変える論点について考察する。

(3)「模倣の詩学」と哲学の親和性について、「陶冶の概念としての模倣」、「連想と連関の概念としての模倣」という形で描いてきたところに、「昇華の概念としての模倣」と総括されるような「模倣の詩学」の情動面での姿を接合できるように分析を進める。諸学の相関というレベルにまで掘り下げて情動面での詩学の転換を描き、情動と想像の接合という形で論理的な側面と総合していくことを目指す。そのための方法論を探る。

(4)「模倣の詩学」は、技法というレベルでは修辞学と、詩作自体の反省的理解というレベルでは哲学と、相対的により多く接点を有していた。そうしたタイプの階層的記述ではなく、同じ思考原理が、時には多少の変形を受け時には異なる名称で呼ばれながらも、広がっていたり続いていたりする事態であるとか、思考の原理と原理がぶつかり合っているような事態を想定しながら、思考構造が転換する姿を力動的に捉える道を探る。

(5)最終的に「模倣の詩学」の転換を、とりわけ情動面において、諸学の相関というパースペクティブから記述する道を探る。人文主義諸学の連関の弛緩、規範的学問の交替といった着地点を見据えながら、情動をめぐる言説と想像力論、物語論との接合を中心とした転換機制の記述へと歩を進める。

## 4. 研究成果

(1)研究の基盤となる文献収集については、とりわけベルリンの国立図書館での集中的な収集によって、当初の予想を上回る成果を得た。館内利用の1次文献の電子化が進んできたことで、18世紀の文筆家の個々の論考に加えて、当時刊行された雑誌も個別記事の形ではなく総体で数多く入手できた。

(2)「模倣の詩学」の情動面に光を当てる出発点として、この時代には、理性によって情念を抑制しようとする哲学的な情念論もあれば、人の心を動かすために情念を巧みに活用しようとする修辞学的な情念論もあったことをまず視野に入れた上で、「カタルシス」という形で情念の浄化を行う悲劇の情動論

的契機の位置付けを探った。「カタルシス」は本来医学用語で、こうした情動操作の効果は治癒的と言えるが、書誌的な確認により、この時代の情動論が心身問題というマターを中心に医学の分野に浸透していることや、近年そうした医学的な情動論が注目を集め、それが「人間学の誕生」という物語に還元される形で研究されてきていることが明らかになった。そのため、詩学や関連する諸学の情動論について論点を整理し、その具体相を明らかにすることで、模倣の詩学は近代美学に取って代わられたとする「近代美学の誕生」という物語への還元とともに、こうした「人間学の誕生」という物語への還元も同時に相対化できるとの見解に到った。

(3)ヴォルフの形而上学を議論の土台としていられると思われる医学者 E.A.ニコライの「情念」論と哲学者ズルツァーの「感情」論を比較することで、異なる学問領域を横断するところで、想像力の作用の仕方が異なることを確認した。ニコライの場合は観念が射影のように情念を喚起するという比較的単純な議論の仕方を行っているが、ズルツァーはむしろ対象が複合的なもの場合に成立する感情について議論している。この構図が詩学における模倣説の段階性の議論、つまり、単純な模倣的な模倣と高度な連関を創出する模倣を比較する構図にそのまま通じるという考えに到った。

(4)ヴォルフの追放と復帰というドラマが展開されたハレという都市に重点を置いて、敬虔主義と合理主義の争いを背景に、主として、敬虔主義の影響を受けた詩学の情動論的な側面について考察した。情念を病のように捉える観念、情動を不可欠の精神的契機と見る思考、情動を積極的に活用しようという発想があるなかで、敬虔主義の影響という点では、情動面を重視する姿勢が確認され、霊感的な詩作やその詩の受容での同化効果、友情という詩の素材の同化的特徴、「崇高」という素材の異化効果にその特徴を認めた。そうした詩学は、スイス派の詩学と親和性があり、ゴットシェートと対立することで時代の理論的振幅の片方の極を形成していたことが把握できた。

(5)敬虔主義を背景としたハレの思想風景では、神学が合理主義哲学を吸収する一方で、宗教的な背景をもつ修辭学的な議論が、「真理は一つでも表現は多様」という論によって、広義の悟性の能力論は取り込みながらも、哲学的な規範詩学の思考に対峙する形となっていた。その作用詩学では、友情信仰に見られる同化性、崇高概念に見られる異化性が、ともに敬虔主義の風土で育まれた宗教的な精神基盤を物語として前提としていて、その共通の物語が、模倣説が転換していくなかで、情動と想像力をつなぎ合わせている回路に

なっているように思われた。

(6)模倣説の転換機制の記述をめぐって思想的考察を深めた。「人間学の誕生」や「近代美学の誕生」という思想史の物語は、諸学の相関のなかで、医学、生理学と哲学、心理学が統合する方向性や、哲学から美学を切り分けて論じる方向性を象徴的に捉えることで暗黙の大きな物語を語る形式を採っているように見えるが、諸学に対する規範的学問の存在が諸学の連関の弛緩と関わっている様を広い視野で観察すると、医学を哲学から切り離す流れも見て取れたり、学問として切り分けたとしても共通基盤があることが依然として見て取れたりするため、個別の動きを時代の象徴だとして大きな物語を語る手法には疑問が残るという結論に到った。

(7)諸学の相関というレベルにまで掘り下げて、情動面での詩学の転換を描き、情動と想像の接合という形で、論理的な面と総合していくための方法論を探った。詩学書のなかで諸学の連関を見極めるという点でも、具体的な議論で模倣の詩学の情動論的な側面に着目するという点でも、物語の発達論や関係論を考える新たなタイプの物語論を作って、そうした装置によって説明するのが望ましいのではないかという今後の研究の方向性を得た。「物語による構造分析」とでも言うような、「物語」を説明原理として用いて、物語の変容、複数の物語のせめぎ合い、物語の入れ子構造がもたらす効果という視点を導入することで、当時の議論や用語法を再解釈して整理できるのではないかという結論に到った。これは 2014 年度からの新たな基盤研究に受け継がれる。

(8)「模倣の詩学」の転換を記述する研究は、膨大な資料から選んだケーススタディという形で進めたこともあり、「転換機制」を考察することが、「転換を生み出しうる機制」を考察するという形をとる結果となった。啓蒙主義時代のドイツ詩学にどのような理論的振れ幅が潜在的にあるかを見極めることで、今後の検証につながる仮説的な結論と新たな方法論上の展開の糸口が得られた。

可能世界論を議論のなかに組み込んでいられる詩学は、神が作った現実世界の歴史という物語に対して、詩人の創造する物語を小規模な模倣と捉える。その物語の有り様については、どのような悟性能力を用いて創造するかによって性質を記述できるようになっている。「模倣の詩学」の情動論的な面を、こうした観点に接続する形で論点整理すると、詩人が想像力によって構築する物語と、受容者がすでに抱えている個人的な物語の関係性で説明することが考えられてくる。連想的な接合で受容者の物語と重ね合わせるように、あるいは、異化的な効果によって受容者の物語をいったん消し去るようにして、詩人の物

語に同化させる。そのことが効果をもつと、受容者の物語の変容につながるのではないか。ここで物語の接合や置き換え、その後の物語の変容に情動論的なプロセスが随伴すると考えられた。

作品が提示している物語と、作者や受容者が個人的に抱えている物語の関係を「昇華」と捉えるなら、それは物語の文脈転換であり、しかもその転換が個と個の類比ではなく、より普遍的なものへと包摂する形で起こると考えられる。「崇高」が異化効果であるとするれば、それに引き続き起こるのが「昇華」である。それらをめぐる議論が、想像力が生み出した連関へと情動が組み込まれるプロセスを説明する位置の議論に相当すると考えられた。

詩学に関わっている学問の相関については、諸学の関係性がさらに悟性の能力論で分節化されたところで議論されるなら、情動もその能力論の規定のなかに組み込まれるので、上位の能力と下位の能力という議論に回収されがちになる。しかし、詩学に関連する諸学が悟性の能力論で分節化されているとしても、情動や想像力に対してどのようなスタンスを取るか、情動や想像力の対象や構築物の複雑性をどのように想定するかはさらに各学問によって議論が異なっているので、詩学の記述装置の側がどのような複雑性の模倣を想定するかで親和的な学問も変わってくるように思われた。人文主義諸学の連関の弛緩、規範的学問の交替については、記述装置の側で見て詩学がどの学問と結び付き易いか、その結び付きの揺れ幅がどのようになるかで計れるとの結論を得た。

詩学に関わっている学問の相関については、物語の関係論によって再解釈を試みるなら、複雑な物語であっても物語には必ず備わる「収束点」が神学や哲学の大きな物語に属しているか否か、作品そのものの物語に対峙する作者や受容者が抱える物語の「収束点」がそれに対してどのような位置にあるかによって情動の問題が異なる形で切り開かれる。人文主義諸学の連関の弛緩、規範的学問の交替については、詩作品の物語が大きな物語としてどのような物語に帰属するか、情動を発生させる物語と物語のせめぎ合いが見られる場合に、それが願望論、現実論、理想論といった物語の性質で見てどの種の物語の形成に主として関わっているか、あるいは、真理の一義性と表現の多様性のどちらをより志向しているかによって見通せるのとの結論を得た。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

福田覚「医学者E.A.ニコライの「情念」と哲学者ズルツァーの「感情」 ドイツ啓蒙主義詩学史の学際的理解の試み」『ドイツ啓蒙主義研究 13』(大阪大学大

学院言語文化研究科、2013年5月31日) S.15-31、査読なし

福田覚「J.J.ピューラをめぐる記述課題の諸断面(1) 敬虔主義の街、霊感的な詩作、崇高概念」『ドイツ啓蒙主義研究 12』(大阪大学大学院言語文化研究科、2012年5月31日) S.11-22、査読なし

福田覚「ドイツ初期啓蒙主義の情動論をめぐって ヴォルフ、ウンツァー、マイアーが示す学際的な振幅」『ドイツ啓蒙主義研究 11』(大阪大学大学院言語文化研究科、2011年5月31日) S.23-38、査読なし

福田覚「フロイトの神経失調論に見る啓蒙と情動」『ドイツ啓蒙主義研究 10』(大阪大学大学院言語文化研究科、2010年5月30日) S.13-36、査読なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

福田 覚 (FUKUTA, Satoshi) 大阪大学言語文化研究科准教授

研究者番号: 40252407